

昔むかし、ジプタル島に、ミラドという貧ますしい女がひとりで暮くらしていました。

ある日のこと、ミラドは、タロイモ畑にするよい土地を探さがそうと思って、となりの島に渡わたりました。すると、天をついてそびえる巨大なタコの木があつて、その根つこの間に、ぴかぴか光るものを見つけました。近づいてみると、それは美しいたまごでした。てのひらに乗せると、たまごはぐんぐん大きくふくらんできました。ミラドはおどろきました。はっと、思いあたりました。

「これは、太陽のたまごじゃないか！太陽のたまごを見つけるなんて、なんと運がいいんだろう！」

ミラドは、たまごをジプタル島の自分の家に持って帰りました。そして、タコの木で葉あで編あんだかごに入れておきました。

三日たつと、たまごがパカン！と割れて、親指よりも小さな男の子が飛び出してきました。

「なんてかわいい子！太陽の子にちがいないわ」

ミラドはその子をそつとてのひらに乗せました。そして、早く大きくなるおまじないに、ヤシの殻からで火をたいて、毎日その子を温あためました。おかげで、男の子はどんどん大きくなりました。男の子は一年もたたないうちに、力の強いかしこい子に育ちました。

ある日、男の子は、ミラドにたずねました。

「お母さん、どうしてぼくたち、タロイモしか食べないの。それに、食べるものがない日がよくあるのは、どうしてなの」

「わたしたちには、小さな畑あかないからだよ。それに、魚を取って来てくれる男の人もないものね」

男の子は、

「お母さん、ぼくはまだ小さいけれど、できるかできないか、見ててごらん！」といつて、海辺にかけ出していきました。

「待ちなさい。魚を取るのには、おまえには、まだあぶないよ」

ミラドは追いかけてきましたが、男の子は、もう海に飛びこんでいました。

男の子は、沖おきまで泳およぎ出ると、こんどは、まっさかさまにもぐりました。とちゅうで

会ったかめの背せなか中につかまって、ぐんぐん深くもぐっていきました。そして、とうとうジプタル島の真下までやって来ました。男の子は、島の底あなに穴を掘ほって、こんどは、上へ上へと上がっていきました。すると、家の前のパンの木の根ねつこのところに来たので、木の幹みきの中を掘りすすみ、いちばん太い枝のとちゆうに穴をあけて、そこからとび出しました。

「お母さん、ちょっと見てごらん！」

ミラドが、大急ぎで家から出て見ると、パンの木の枝から、びゅーっと海の水がふき出していました。それといっしょに、コブダイや、チョウチョウ魚うお、タコにエビ、ヒラメやイカなどが、どっと飛び出してきて、ミラドの頭の上から、スコールのように降りそそぎ、地面をはねまわりました。海の水は、大波が寄せてくるとふき出し、波が引くとおさまるのです。ミラドは、びっくりするやらうれしいやらで、涙なみだと水でびしょぬれになりながら、男の子をだきしめました。

パンの木は、大波が来るたびに魚の雨を降らせたので、ミラドと男の子は、ちっともひもじい思いをしないで、楽しく暮らせるようになりました。そして、あまった魚は、みんな近所の村の人たちにくばりました。

村の人たちは、はじめのうちは、たいそう喜んでいましたが、やがて、だんだんミラドをねたみ始めました。

ある日、村の人たちは、寄り合っあってこんな相談をしました。

「あの男の子は、たしかに、すばらしいことをやってのけたよ。でも、おかしいじゃないか。わしらにできないことが、どうしてあんな小さい子にできるんだ。一度あの木を切り倒して調べてみようじゃないか」

「それがいい、それがいい」

「すぐに切り倒そう」

村の人たちは、手に手に斧おのを持って、ミラドのパンの木の下に集まりました。そして、寄ってたかって、根元から切り倒してしまいました。すると、切り口から、海の水がすさまじい勢いでふきだし、まるで一本の柱のようになって、天にもとどかんばかりになりました。そして、降りそそぐ水は、島全体をおおいつくしてしまいました。村の人たちはみんな、おぼれて死んでしまいました。

ミラドと男の子は、いかにのだに乗って島を逃れることができました。

ジプタル島は、それっきり、海の下に沈<sup>しず</sup>んでしまいました。いまでも、そのあたりを  
カヌーで通りすぎるとき、そこが浅瀬<sup>あさせ</sup>になっているのを、すきとおった海の下に見るこ  
とができます。

おしまい。

村上郁再話

資料『ミクロネシアの民話』秋野癸巨矢著／太平出版社